



ゴミの城壁が北京を包囲！ 王久良監督の映画が警鐘



山本千晶

拡大を続ける中国の首都・北京。新しい高層ビルが出現する一方には、そこから吐き出される膨大なゴミがある。それが運び込まれる処理場が次々と設置され、北京はあたかもゴミ処理場の城壁に取り囲まれたごとくである。それを見つめたドキュメンタリー映画が注目されている。以下は山本千晶氏の紹介文。

ゴミ問題を扱った王久良監督のドキュメンタリーが、映画の枠を超えて政策に影響を広げて



王久良監督

いる。カメラマンとして作品の題材を探していた王監督は2008年、故郷の山東省を歩いていた。ところが、被写体として収めるに耐える「美しい」場所は見つからなかった。カメラを視線より上に

向ければ建設中の鉄塔がレンズを遮り、下に向ければ地を這うビニールのゴミがファインダーを覆う。気づけば、ここ20年くらいに間にプラスチック製品が増え、ゴミとなって身の回りにあふれていた。

北京に戻った王監督は10月、ゴミ探しの旅を始めた。高層ビルが林立し、目覚ましい経済発展を遂げている北京市の懐の中では、ゴミなんて存在しないと思っていた。ゴミはどこに行っただろう？ 自分が出したゴミがどこに行くのか気にしたこ

ともなかった王監督だが、その行方を追ってみようと思った。カメラをかついでバイクにまたがり、家の前に来た収集車を追跡した。向かった先はゴミの山。そこから王監督の数年にわたるプロジェクトが始まった。2011年に映画『北京—ゴミの城壁』が完成し、今年3月17日に地球環境映像祭で日本でも上映された。

Google Earthを使って俯瞰した北京の中央に位置するのは、かつて栄華を極めた紫禁城の正門—天安門。その天安門から四方に離れること数キロ、周囲にはゴミの山が連なる—北京を取り囲む城壁のように。『北京—ゴミの城壁』は、北京市のゴミ問題を扱ったドキュメンタリーだ。題材がゴミであるにも関わらず、作品には「美しいもの」が映されている。カメラマンという王監督の本性ゆえか、「美」が映し出された本作は、静かに、でも確実に心に沁みてくる。

視界をばやかす霧の向こうに



白い点が北京市を困むゴミ処理場

一点、小さく太陽が映る。雲が切れたら見えるはずの太陽は、汚染された大気と朝霧のためにその光が閉じ込められているように見える。

捨て置かれたゴミのために汚染された河川の上を、飛行機が飛ぶ。水面に映る飛行機の小さな影は、富の象徴として上空を行く飛行機と目の前にある現実との距離を際立たせる。手作業

でゴミの中からわずかの資源を拾う日雇い労働者は、翼を広げて飛ぶこともできない。「ゴミ問題は、単に環境問題だけではない。ゴミを扱うことは、現在の利権構造にメスを入れるようなもの」と、王監督は口を引き締めて語る。日本でも産廃業界と暴力団が関わりあってきたように、北京でも開発業者とゴミ

収集業者の癒着は存在する。当然、問題を警告する王監督の安全が脅かされる危険もある。それでも王監督は腹をくくった。

「私は政府系のジャーナリストではない。もし自分が見たものを作品にしたら使命は果たしたと考えるならば、私は自分の責任から逃げることになる。ゴミの山は、私の想像をはるかに超えるものだった。1人の人間として、責任を果たしたい」



映画に先立って写真展を開催するにあたり、王監督は広東省の連州を選んだ。題材が北京のゴミ問題であるにも関わらず異なる地で開催したのは、まさに外堀を固めるためだ。中国でも南部地方のマスメディアは比較的小さく、社会問題に対してもおおらかで、社会問題に対しても報道の敷居が低い。その地で先に報道させた。

写真展の反響は大きく、『南方週末』を皮切りに、『新華社』

や『人民日報』も後を追い、海外のメディアも注目するようになった。こうなったら当局も動かざるを得ない。結果、温家宝首相がゴミ問題の改善を指示するという事態になった。それでも王監督は表情を緩めない。

「北京のゴミ問題は、誇りを持って言いますが、作品の公開後に大きく変わったと思う。でも、ゴミの山が減っても、ゴミ問題がなくなっただけではない。ゴミの本質がどういふものか、もっと探りたい。人々との意識を変えるためにも、モノはどこから来てどこに行くのかを知らせたいと思う」と、今後の抱負を口にする。

人類の長い歴史の中では、しばしば1人の行動が社会を変えてきた実例がある。同様に1つの作品が社会を変えることがあるとすれば、『北京—ゴミの城壁』は間違いなく人々の心を動かし、北京におけるゴミ問題の解決に寄与する作品だろう。

日中韓環境情報サイト
http://www.eden-j.org より